平成二十二年度

国　語（記述式）試　験　問　題

（人文・社会科学専攻）

（注意）一、各問題の設問の数に注意せよ。

二、解答はすべて別紙解答用紙の定められた欄におさまるように記入せよ。なお、一行に相当する枠に、二行以上にわたって記入してはならない。正しく記入されていない場合には採点されないので注意せよ。

三、解答文中の誤字（仮名づかいの誤りも含む）は、その程度に応じて減点する。

1

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

この部分に記載されている文章につきましては、著作権上の問題から掲載することができませんので、ご了承願います。

（杉田　敦氏の『ノード　反電子主義の美学』による）

＊（注）バラード――J・G・バラード。イギリスの小説家、SF作家。

今世紀――この本文の中では二十世紀のことを指している。

R・ドーキンス――イギリスの生物学者。主要著作に『利己的な遺伝子』『遺伝子の川』がある。

M・アンリ――ミシェル・アンリ。フランスの哲学者。

テクスチャ――質感、手触り。

カウンター・カルチャー――伝統的かつ支配的なメインストリームの文化に対抗する文化。

ユマニスム――ヒューマニズム。人間性・人間的特色を尊重する思想。

テクノ・アート――科学技術を表現戦略として取り入れた芸術様式。

J・v・ノイマン――ハンガリー出身の数学者。数学に留まらず、物理学、経済学、工学、心理学、政治学など、多くの学問領域に影響を与えた。アメリカ移住後、原子爆弾の開発に関わっていたことでも知られている。

A・タルスキ――ポーランド出身の数学者・論理学者。

K・ゲーデル――オーストリア出身の数学者・論理学者。一九三一年に二十世紀の数学界で最も重要な発見とされる「不完全性定理」を発表した。

L・ヴィトゲンシュタイン――オーストリアの哲学者。主要著作に『論理哲学論考』『反哲学的断章』がある。

P・K・ファイヤアーベント――オーストリアの科学哲学者。主要著作に『方法への挑戦』『理性よ、さらば』がある。

フラグメント――断片。

量子力学――分子・原子・素粒子・原子核などにおける物理法則を研究する学問。

SDI計画――宇宙空間における軍事的優位を目指した、一九八〇年代に構想されていたアメリカの軍事計画。

〔設　問〕

(一) 片仮名傍線部(1)～(5)について、それぞれ漢字二文字に直して記せ。

(1) キフク　(2) チメイ　(3) ボウサツ　(4) コクジ　(5) キンキ

(二) 波線部(1)～(5)の漢字について、それぞれその読みを平仮名で記せ。

(1) 躊躇　(2) 殺戮　(3) 間隙　(4) 末裔　(5) 瀰漫

(三) 点線部(あ)～(お)について、それぞれその読みを平仮名で記せ（漢字部分の読みだけを記入すること）。

(あ) 兆し　(い) 施した　(う) 纏った　(え) 陥って　(お) 速やかな

(四) 本文中における〈科学技術〉観として、本文の論旨に照らして、最も不適当なものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 科学技術は、二十世紀の社会を動揺させた地球規模の重大な問題とは無関係に、現在もなお急速に発展している。

(2) 科学技術は、その存在自体が独立性を帯びている不可侵の領域であり、本質的に自己保存的な性格を持っている。

(3) 科学技術は、楽観主義的な傾向を孕んだ二十世紀的な精神を背景として、その社会的な影響力を拡張させてきた。

(4) 科学技術は、進歩史観を否定する同時代の文化から批判されながらも、利己的なまでに自己発展を追求してきた。

(5) 科学技術は、現代になればなるほど、その全体像を総合的に俯瞰することが人類一般にとって困難になってきた。

(五) 空欄 I に入る語として、本文の論旨に照らして、最も適当と思われるものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 自己分析的な視線　(2) 自己保身的な戦略　(3) 自己超越的な飛躍

(4) 自己分裂的な意識　(5) 自己免疫的な機能

(六) 空欄 II に入る語として、本文の論旨に照らして、最も適当と思われるものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 量的な拡大の信仰　(2) 線的な進化の神話　(3) 知的な批判の論理

(4) 質的な価値の夢想　(5) 美的な表現の実践

(七) 二重傍線部(イ)の〈〈生の自死〉への道程〉に関する説明として、本文の論旨に照らして、最も適当なものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 科学技術に偏向した現代世界における人間存在の立場を自ら危うくさせてゆく道のり、ということ。

(2) 伝統的に保持、継承されてきた人間の文化的な能力を自らの手で消し去ってゆく行程、ということ。

(3) 二十世紀における芸術と科学技術との間の密接な関係を次第に解消させてゆく道のり、ということ。

(4) 科学技術と同様に発展の停滞期にある現代芸術の生命力をさらに衰退させてゆく行程、ということ。

(5) 科学技術の発展を新たに継承することで伝統的な生活形態を自分で否定してゆく行程、ということ。

(八) 本文の論旨に照らして、最も不適当なものを次からひとつ選び、番号で記せ。

(1) 二十世紀の人類は、特に科学技術の発展への邁進という側面においてあまりにも猪突猛進的であったと同時に、そのような自らの偏向した在り方への省察という批評的な営為を決定的に欠落させてきた。

(2) R・ドーキンスの〈利己的遺伝子〉説は、人類の歴史上に様々な形で見られる社会化された物語が孕む擬装性を指摘した論であるが、それは現在の科学技術の本質を考察する上でも非常に示唆的である。

(3) 二十世紀のアートは、常に科学技術と相関的に発展することによって自らの表現的な革新性とその社会的影響力を生み出し、科学技術の絶対視と神格化へのアンチ・テーゼとしての役割を果たしてきた。

(4) ポスト・モダン的思想の拡大を促進したノイマンの思想は、量子力学の定式化に関する認識や電子情報テクノロジーの発展に革新的な進歩をもたらし、科学技術をめぐる広大な学問の領域を開拓した。

(5) 冷戦後の世界では、ノイマンの思想を基盤とした電子計算機が世界を統治する主体的立場につくことが危惧されるのだが、そのような事態を生み出したのは科学技術への人類の妄信的姿勢なのである。

(九) ノイマンが二十世紀の世界にもたらした思想的特質に関する包括的な説明として最も適当と思われる箇所を、本文全体の論旨を踏まえて、十八字以内で抜き出して記せ。

(十) 二重波線部(a)〈保育のために準備された空間〉を、本文中におけるその比喩表現が示す意味を明確にして、四十字以内で具体的に説明せよ。なお、解答に際しては本文中の語句は用いてよいが、本文からの抜き出しのみの解答は認められない。

2

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

*こゆるぎの磯ちかき笘屋の内にも、ひひなあそびするをとめどもは、A、山ぶきの花など、こちたきまで瓶にさし、けふの日のくるるを惜しと思へるさま也。野に出てははこなどつむもあるは、けふのもちひの為なるべし。

七とせのむかし、此所を過けるは九月九日にて、別来し親はらからのことなど思ひ出て悲しかりしに、(1)けふは一二日のうちに逢みんことをおもへば、うれしきあまり、心さへときめきして、それとなくうち笑みがちなるを、かたへなる人らは、(2)ものぐるほしきにやなども思ふらんよ。明日は府にまゐれば、公私の用意ありとて、男のかぎり、皆戸塚の宿にといそぐままに、(1)ひとりのどかにも行がたくて、同じさまにやどりにつきぬ。

三日の夜より雨ふりいでて、(3)つとめても猶やまず。金川、河崎、品川などいふ駅々もただ過にすぎきて、芝にまゐる。ここより大路のさま、たかき賤しき袖をつらね、馬、車たてぬきに行かひ、はえばえしく賑はへるけしき、七とせのねぶり一ときにさめし心地して、うれしさいはんかたなし。其夜は御館にありて、三月B日といふに、ふるき家居にはかへりぬ。

いふかひなけれど、親族のかぎり、近きはをば、いとこなど待あつまりて、とりどりに何事をいふも、まづおぼえず。をさなき妹のひとりありしも、いつかねびまさりて、髪などあげたれば、わが方には見わすれたるを、かれよりうち出でんもつつましくやありけん、をばの後にかくれて、なま恨めしとおもへるけしきに見おこせたるまま、猶心得ずして、「そこにものし給ふは、(4)いづれよりの客人にかおはす。ゆゆしげなることには侍れど、過行はべりし母のおもかげに、あさましきまで似かよひ給ふめるは」と問へば、かれはうつぶしになりて、つらももたげず。(2)をばもはなせまりてものいひやらず。みな「は」と笑ふにぞ、はじめて心づきぬ。かくて盃あぐるほど、老たる父の「*佐々目にいますが、(5)やがてまゐり給へり」と妹のいふ。

（武女の『庚子道の記』による）

*（注）こゆるぎの磯――歌枕。現神奈川県小田原市周辺。

ははこ――母子草。

もちひ――餅。草餅（母子餅）。

府――江戸（藩邸）。

戸塚――現神奈川県横浜市。江戸から数えて、東海道五番目の宿場。

金川――現神奈川県横浜市。神奈川。江戸から数えて、東海道三番目の宿場。

河崎――現神奈川県川崎市。江戸から数えて、東海道二番目の宿場。

品川――現東京都品川区。江戸から数えて、東海道最初の宿場。

芝――現東京都港区。飯倉神明宮。

御館――江戸藩邸。

ねびまさりて――すっかり成長していて。

佐々目――笹目。現さいたま市・戸田市。

〔設　問〕

(一) 二重傍線部「九月」の読みを記せ。

(二) 空欄部 A B に入れるべき最も適当な言葉は以下のどれか。それぞれ記号で記せ。

A (ア) 梅　(イ) 桜　(ウ) 桃　(エ) 藤　(オ) 椿

B (ア) 四　(イ) 五　(ウ) 六　(エ) 七　(オ) 八

(三) 傍線部(1)「はらから」(2)「ものぐるほしき」(3)「つとめて」(4)「ものし給ふ」(5)「やがて」の現代語訳をそれぞれ記せ。(2)・(4)は終止形で答えること。

(四) 波線部(1)について、①なぜ筆者はゆっくり旅をしたいと思ったのか、また②それにもかかわらずなぜ旅を急いだのか、それぞれ説明せよ。

(五) 波線部(2)について、①なぜ筆者の叔母は、悲しみがこみあげて言葉につまったのか、②集まった筆者の親族は誰がどう発言したことを笑ったのか、それぞれ説明せよ。

3

次の文章を読んで後の設問に答えよ。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

楚有レ士、曰二申鳴一。治レ園以養二父母一、孝聞二於楚一。王召レ之。申鳴辞不レ往。其父曰、王欲レ用レ汝、何謂レ辞レ之。申鳴曰、何舎為子乃為臣乎。(1)其父曰、使汝有禄於国、有位於廷、汝楽而我不レ憂矣。我欲二汝之仕一也。申鳴曰、諾。遂之レ朝受レ命。楚王以為二左司馬一。其年、遇三白公之乱、殺二令尹子西、司馬子期一。申鳴因以レ兵囲レ之。白公謂二石乞一曰、申鳴天下勇士也。今将レ兵。為レ之奈何。石乞曰、吾聞、申鳴孝子也。劫二其父一以レ兵。使三人謂二申鳴一曰、子 A レ我、則与レ子分二楚国一、不 A レ我、則殺二乃父一。申鳴流涕而応レ之曰、始則父之子、今則君之臣、已不レ得レ為二孝子一矣。(2)安得不為忠臣乎。援レ桴鼓レ之、遂殺二白公一。其父亦死焉。王帰賞レ之。申鳴曰、

受君之祿、避君之難、非忠臣也。正君之法、以殺其父、又非孝子也。行不B全、名不B全。若此而生、亦何以示天下之士哉。遂自刎而死。

（『韓詩外伝』による）

＊（注）舍――捨に同じ。

左司馬――司馬は軍事を司どる大臣、左はその次官を示す。

白公――名は勝、楚の平王の孫。

令尹――宰相。

乃――なんじ。

捋――ばち。

〔設　問〕

(一) 傍線部(1)・(2)を書き下し文にせよ。ただし、助詞・助動詞に当たる語は平仮名で記し、他は漢字を残して記せ。

(二) 波線部の「使」は他の漢字に置き換えると波線部の文意が理解しやすくなる。(a)その漢字を本文の中から抜き出せ。(b)また波線部を平易な口語に訳せ。

(三) 空欄 A には「味方、仲間になる」という意味の語が入る。その意味を持つ漢字一字を本文の中から抜き出せ。

(四) 空欄 B に入る漢字として最も適当なものを次より選び、番号で記せ。

(1) 一　(2) 正　(3) 二　(4) 孰　(5) 両

(五) 中国清末の学者梁啓超は申鳴の行動を次のように述べて評価している。

始也(1)順親之志　終也(2)死国之職

この評価の文章における二重傍線部(1)・(2)は、本文の語で示すと各々何であったということになるか。その語を本文の中から漢字二字で抜き出せ。

(六) 二重波線部に示される申鳴の行動に関して、その最大の要因は何であると考えられるか。本文中の漢字を利用して漢字二字で答えよ。